



# 東京矢上高会 二ユース

第 25 号

発行日 令和六年十月二十八日  
発行回数 第二十五号

島根県立矢上高等学校  
卒業生会東京支部  
中山正雄  
中宅良二  
三葉市緑区高津戸町  
三〇九―四四―三〇五



## 令和6年度総会・懇親会が開催されました

第四十九回令和六年総会・懇親会が五月十九日(日)久阿利センターで開かれ、出席した卒業生は、藤原柳(一期)藤原寛(二期)藤原寛(三期)藤原寛(四期)藤原寛(五期)藤原寛(六期)藤原寛(七期)藤原寛(八期)藤原寛(九期)藤原寛(十期)藤原寛(十一期)藤原寛(十二期)藤原寛(十三期)藤原寛(十四期)藤原寛(十五期)藤原寛(十六期)藤原寛(十七期)藤原寛(十八期)藤原寛(十九期)藤原寛(二十期)藤原寛(二十一期)藤原寛(二十二期)藤原寛(二十三期)藤原寛(二十四期)藤原寛(二十五期)藤原寛(二十六期)藤原寛(二十七期)藤原寛(二十八期)藤原寛(二十九期)藤原寛(三十期)藤原寛(三十一期)藤原寛(三十二期)藤原寛(三十三期)藤原寛(三十四期)藤原寛(三十五期)藤原寛(三十六期)藤原寛(三十七期)藤原寛(三十八期)藤原寛(三十九期)藤原寛(四十期)藤原寛(四十一期)藤原寛(四十二期)藤原寛(四十三期)藤原寛(四十四期)藤原寛(四十五期)藤原寛(四十六期)藤原寛(四十七期)藤原寛(四十八期)藤原寛(四十九期)藤原寛(五十期)藤原寛(五十一期)藤原寛(五十二期)藤原寛(五十三期)藤原寛(五十四期)藤原寛(五十五期)藤原寛(五十六期)藤原寛(五十七期)藤原寛(五十八期)藤原寛(五十九期)藤原寛(六十期)藤原寛(六十一期)藤原寛(六十二期)藤原寛(六十三期)藤原寛(六十四期)藤原寛(六十五期)藤原寛(六十六期)藤原寛(六十七期)藤原寛(六十八期)藤原寛(六十九期)藤原寛(七十期)藤原寛(七十一期)藤原寛(七十二期)藤原寛(七十三期)藤原寛(七十四期)藤原寛(七十五期)藤原寛(七十六期)藤原寛(七十七期)藤原寛(七十八期)藤原寛(七十九期)藤原寛(八十期)藤原寛(八十一期)藤原寛(八十二期)藤原寛(八十三期)藤原寛(八十四期)藤原寛(八十五期)藤原寛(八十六期)藤原寛(八十七期)藤原寛(八十八期)藤原寛(八十九期)藤原寛(九十期)藤原寛(九十一期)藤原寛(九十二期)藤原寛(九十三期)藤原寛(九十四期)藤原寛(九十五期)藤原寛(九十六期)藤原寛(九十七期)藤原寛(九十八期)藤原寛(九十九期)藤原寛(百期)

## 令和七年度第五十回記念総会 五月十八日(日)アルカディア 市ヶ谷私学会館で開催予定







# 人生百年時代の 挑戦者として

## 三宅雅寛 (二十三期)

**表彰状**  
 貴殿は警視庁と精力的な調整を重ね、これまで前例のない業務改善を次々と成し遂げない正通行抑止を初めとした大きな成果をあげました。よってここにその業績を表彰します。  
 平成二十八年三月七日  
 首都高速道路株式会社  
 代表取締役社長 橋本鋼太郎

これは私が平成十八年二月から二年間、首都高速道路株式会社に出向した後、いよいよ元の職場に戻るという時に社長から頂戴したものです。聞くと、首都高速道路株式会社(前身は日本道路公団)五十年の歴史において、このような個人表彰は初めてであり、「今後これだけの仕事をやる人間は現れないであろう」「当社及びお客様に絶大な利益をもたらしたことは、まさに表彰に値する」と言ってくれました。そのお気持ちがあつて、この表彰状は年を経ても色あせることなく、今でも私の宝物になっています。

首都高は「民間にできることは民間に委ねる」との時の小泉政権下の政府方針を受け、日本道路公団に代わる新しい組織として、平成十七年に設立された会社です。この混乱期中、平成十八年に私は出向したのでした。

それまでとは全く違う職場環境でカルチャーショックを受けました。主な仕事は地方自治体が主催する防災



会議等へ首都高を代表して出席したり、警視庁交通部との連絡調整の役を担ったり、日々発生する各種トラブルに対応したりと。

社員からは「腰掛け」としか見られていないような雰囲気の中で、私は、ここに骨を埋める覚悟で「自分がどう働けば、首都高のためにも、お客様のためにもなるのか」と自問自答しながら仕事を探し、果敢に挑戦していこうと決意しました。まさに「挑戦者」だったと思います。

こんな気持ちで取り組んでいると不思議と周りから声を掛けられることが増え、首都高の長年の懸案であり、解決するには困難を伴う相談が次々と寄せられるようになりました。私は挑戦者です。与えられた困難を己を活かすチャンスと捉え、常に前向きだった自分がそこにいました。前向きになれる私のパワーの源は信じて応援してくれる今は亡き父母であり、更には見えないけれども脈々と続いてきた先祖の存在です。

あの頃も、神棚や仏壇に手を合わせ、苦しいときにはその苦しさを共にし、最後まで見守ってくれたご先祖様がそこにおられることに感謝し「何があっても大丈夫だ」という力を与えてもらっていました。

人生百年時代の到来と言われます。この先何が起るかわからないこの世の中で、いくつになっても「挑戦者」の心を忘れずにいたいと思います。この表彰状はこの心を思い起こさせてくれます。

私は現在、七十才を超えましたが都内の大学のオープンカレッジで歴史や国際情勢を楽しく学んでおります。家族からは「学んでもすぐに忘れちゃうんじゃないの?」と揶揄されながらも、神棚に毎日手を合わせながらボケ防止に挑戦しております。

# 高校を卒業して四十五年 今、故郷に想うこと

## 森脇 誠 (三十一期) 矢上出身)

昭和五十四年三月、矢上高校を卒業して四十五年が経ちました。数年に一度帰郷するたびに思うことは、自分を育ててくれた自然豊かなこの地を大切にしたい、そして自分にはこんな素晴らしい故郷が有ることを誇らしく思います。高校卒業後、広島で四年間過ごした後、東京で職を構えて四十余りが経ちました。毎日職場まで片道二時間。電車の車窓は、季節と共に姿を変えます。ただしそれは、自然よりも人工的な変化が多く眼に入ってきてます。例えば、新しい駅ができ、工事中のビルが日に日に高くなったり人の流れが変わり、その中で通勤サラリーマンの服装が季節に合わせて厚着、薄着になりま

す。強いて言えば、河川の土手にある桜がその時期になると決まって芽吹き、花を満開にすることなど、近距離の変化から季節や自然を感じるくらいです。

久々に帰郷すると、木々の色で季節感を感じる一方で、地形そのものに変化はなく、記憶でここにあった岩、大木は、今もでんと居座っています。いっこうに変わっていません。令和五年十月に断魚溪を訪ねた時は水量は当時と異なっていたかもしれませんが、岩畳、狭い岩溝は、中学高校の時に見た記憶と一つも変わっていないように思いました。自然の雄大さ偉大さを感じ、故郷はひとつも変わっていないことが直感でできました。

二〇一〇年三月号に本誌にはじめ



て寄稿してから今回三回目になります。がテーマは今回も同じ十八年間生まれ育った故郷への想いについてです。遠く離れた東京で、毎日健康で働くことができるのは、自然豊かな故郷が心身を丈夫に育ててくれたことが大きいと感じています。

実家は農家で、労働に休みがあるわけでもなく両親は自然を相手に二十四時間三百六十五日、身を粉にして農作業に励んでいました。自分は兄らと一緒に手伝う日々でした。農作業は、丈夫な身体と豊富な経験、過去から学んだ知恵が資本となり、自分の考え一つで収穫に大きな差が出てくる、その年の出来栄の良し悪しはすべて自分の責任になる。出来栄は、天候に左右される。稲刈りの季節には、台風の接近による水田に水を入れる水の量、を自分の判断で決める親父の考動から学びました。親父が「水を見に行くから一緒に付いてこい」とひとこと言うだけ自分はそのういうものだと思っただけ思わず付いて行きました。親父が理屈理由を説明してくるわけでもなく、また自宅に戻ってくる。今思えば、色々なことをこれで学びました。一つ目が他人を思いやる心。共同の水路から自分の水田に取り込む。なんですべてせき止めて自分の水田に入れないのか。公共(共同)の所有物使用、他人のことを思いやる基本的なルール、川上から順に自分の水田に水を入れる。川下の他人の水田の状態を見ながら自分の水田に取り込む水の量を調節する。

二つ目が向上心を持ち続ける心。毎年同じ水田で稲作をするが出来栄は毎年異なるという。種まき、育苗、田植え、肥料、消毒、稲刈りまでの時期・タイミングが気象に左右

されるから、毎年の行動を日記に記録し、これをもとに今年の作業時期や方法を決める。昨年はこの時期にこれくらいの水を入れたから今年はこのくらいにしてみよう。収穫は今年の出来栄えに感謝しつつも、この時期にこうすればよかったと反省もあるという。それをすぐに日記に書き込む。自分の知恵と工夫で、結果に大きな差が出るため、日々の努力を怠らないことの大切さ。

自分にとって、四十年余りのサラリーマン人生には故郷が育ててくれた経験が役立っています。

基本的に組織で仕事に取り組み、成果物を生み出す。組織で取り組む共同作業では他人への思いやりとこ

のやり方ではないのか、もっといい方法があるのではないか。もっと便利な、いい製品が出来るのではないかと妥協しない仕事に対する取組みは故郷の農作業で経験したことが大いに役立っていると感じます。

仕事に対する姿勢は仕事によって変わるものではありません。まもなく自分は定年退職を迎えます。自分が故郷で自然を相手に十八年間学んだ教訓を後輩に伝えていきたいと思っています。それをどう受け止めるかは本人次第ですが、そして、今の暮らしの便利さに感謝しつつも、こんな時代だからこそ、自然豊かな故郷の生活環境を次の世代に引き継いでほしいと思います。



(令和六年八月 森脇誠さん撮影)



(令和六年八月 森脇誠さん撮影)

(令和五年十月 森脇誠さん撮影)



# 矢上高校 野球部の思い出

## 飯田康之 (五十三期)

皆様初めまして。毎回、東京矢高会ニュースを楽しみに拝見させていただいていたところ、会報寄稿のお誘いをいただき、折角なので筆を執った(パソコンを開いた?)次第です。高校時代に所属していた野球部について、久しぶりに振り返ってみたいと思います。

私の高校生活は、一言で言ってしまうとほぼ野球一色でした。小学校三年生から矢上スポーツ少年団で野球を始め、中学校三年間も野球部に所属していました。決して才能に恵まれていた訳でもなく、高校で野球を続けるか悩んでいました。そんな時「矢上高校が初めて甲子園に行けるかも!」と町が大変盛り上がりま

した。石見中学校時代に全国大会に出場したチームのメンバーがほぼ全員矢上高校に入り、三年生となった最後の夏、矢上高校はあれよあれよと勝ち進み、あと一勝で甲子園となった決勝戦で、現在も福岡ソフトバンクホークスで活躍する和田毅選手を擁する浜田高校に敗戦、矢上高校の甲子園初出場の夢は惜しくも破れてしまいました。中学校近くのいわみプラザには今で言うところのバブルックビューイング(フロアの真ん中にテレビを置いただけですが…)が設置され、私もドキドキしながら先輩方の戦いを見守りました。最後まで諦めず戦い抜いた先輩方の姿

を見ていた私は、「やっぱりまだ野球がしたい!」と高校でも野球部に所属し、三年間をほぼ野球漬けの生活を送ることになりました。すごい選手でもなく、目立った活躍をしたわけでもない、田舎の高校の平凡な高校球児でしたが、真剣に野球に取り組む努力した、厳しくも楽しい三年間は、今の自分を作る土台となっていると感じます。

皆様ご存じのとおり、盆地である矢上の冬は雪深く、グラウンドで野球をすることができません。冬場は雪の積もる中、長靴や足袋で走ったり、筋力トレーニングや素振りなどをして過ごしていたのですが、あるとき、グラウンド脇に、屋内で練習ができるビニールハウスを作ったとき、冬でもマシンを使っているインング練習や、ピッチングの練習ができるようになりました。当時、選手だった我々も土を運んでマウンドを作ったり、ハウスの部材を運んだりして手伝い、出来上がったときはとてもうれしかったのを覚えています。どのような経緯で作っていたのかの申し訳ないことに覚えていたのですが、当時の大人の皆様方が、我々生意気な学生のために頑張って頂いたのだと、今ならわかります。ありがとうございました。

また夏場には、よく石見スタジアムで練習をしていました。練習のために、高校からスタジアムまで往復五キロの道をランニングするのですが、ユニフォーム姿で走っていると道で会う方々から「がんばれ!」と声をかけて頂いたのを覚えています。皆さんに見守られていたなと感じます。

現在の矢上高校は元プロ野球選手を監督に迎え、広く全国から部員が

集まっており甲子園も狙える強豪校となっておりと聞きます。後輩たちの活躍を、東京から楽しみにしています。皆様、矢上高校野球部の応援をよろしくお願いいたします!

### 第70回 1997年(平成9年) 島根大会 矢上高校

2回戦	09-8	出雲西
3回戦	09-1	浜南学園
準々決勝	06-5	江の川
準決勝	05-1	松江南
決勝	●1-2	浜田

## 矢上の方言

はあ忘れんさつたらう。高校時代に使うとった矢上弁、たまにやあ思出しちゃんさいよ。はあわしも矢上ゅう離れて四十一年になるけえ、どがあな矢上弁があつたか、忘れてしもうたで六年前までは母親と一緒に暮しとったけえ、ちよつとした会話の中で、出てきて「あつ!」こがある方言があつたのお」ということもありました。

前号の「もむない」思い出しんさつたかいな。今でも矢上じや使おとりんさるかいな。お爺さんやお婆さんは使おとりんさるかもしれんが

正解は「まずい」「美味くない」でした。『日本方言大辞典』によりやあ奈良や和歌山・京都府、大阪府、兵庫、島根県(石見地方)、広島県(山県郡)でも使われとるちゅうて書いたるげな。

江戸時代の滑稽本「東海道中膝栗毛」の淀川の船下りの場面にああ、弥次喜多たちが乗っこんでる船に商船が近づいて、「飯食らわんかい、酒飲まんかい」と言って食べ物や売っころんさるげな。矢上弁なら「飯ゆう食いんさらか、酒よお飲みんさらんか」。それに対して乗客が「この汁は、もむないかはり、ねからぬるふていかんわい(岩波文庫『東海道中膝栗毛(下)』一五六頁) 標準語で言えば「この汁はまずいいうえに、ひどくぬるくていかん」と言うのですが「まずい」という意味の「もむない」が使われています。「飯間浩明・ことばをめぐるとりごと」より引用。

この語源は、毛瀾(もみ)ない。広辞苑で毛瀾(もみ)とは「アカガエルの異称」とあります。吉野町南国栖(くず)にある浄見原(きよみはら)神社では、アカガエルなどを供える「国栖奏(くずそう)」という伝統行事があり、『日本書紀』にも登場しているようです。この地方では力エルを食べる習慣があり、昔は食用で最高の珍味として献上されたそうです。上等で美味なことから、美味いものは「もみあるもの」と言い、「もみがない」とは美味くないになったそうです。国栖(くず)では、今でも赤い力エルを「モミ」、ヤマアカガエルを「モミガエル」と呼ぶそうです。今回の解説は文学的になってしましました。

さあ、乾いたぞうきんを絞るように、ひねり出した今号の矢上弁は「どんとう」。この間鳥取やら広島に行った時、言うても通じませんでした。はあ使おとりんさらんかったです。矢上弁の「どんとう」。思い出しんさらんかったかいな。よお思出しんさらんかったら、矢上の親戚や同級生に電話して聞きんさらんかったもええ。答は次回の総会で。あつ、来年の事を言やあ、鬼が笑いんさらんかもしれんが、来年の総会は五月十八日(日)にやるよう今年と同じ「アルカディア市ヶ谷私学会館」を予約しとるけえせひ予定しちゃんさいよ。来年は五十回目の記念総会だけええ。

◆前号の矢上弁

「もむない」

◆今号の矢上弁

「どんとう」



今年の夏に思うこと

三宅良二(三十五期)

今年の夏は、パリ五輪の日本選手連日の活躍で寝不足ぎみでしたがようやくそんな日が終わったかと思うと、大社高校の活躍に、テレビ機敷で手に汗を握りながら観た甲子園と、ことのほか暑い夏でした。よく筋書きのないドラマと言われますがまさにドラマ顔負けの熱戦でした。立派なベスト8でした。「出たら負け」の印象のある島根県代表でしたが、立派でした。常連校、強豪校と呼ばれる相手に臆することなく凄く試合でした。相手も同じ高校生だということも思い出しました。大社高校はベンチ入り二十人の内一人が鳥取県出身で、他は島根県内出身のことでした。

最近、野球留学が話題になることがあります。「県外出身者ばかりで甲子園に勝つてうれしかった」というスポニチの記事がありました。その記事の中では「うれしさに決まってるじゃん」と。私も全く同感です。

矢上高校も、甲子園を目指して町内、郡内、県内はもとより、県外からも大勢の生徒が集まって頑張っているようです。少子高齢化、人口減少、子供の減少、東京の一極集中等々、今の日本を取り巻く問題は個人はもちろんな一市町では到底解決できるような問題ではありません。そんな中で中学校を卒業をひかえた多感な時期に、親元を離れて島根県の矢上くんたりまで行こうと決断して、親を説得して、良く来てくれた

2024年秋の高校野球島根大会 矢上高校

1回戦	04-3	平田
2回戦	05-4	立正大浜南
3回戦	04-0	石見智翠館
準々決勝	03-2	出雲
準決勝	●1-2	開星
3位決定戦	09-2	大田

なあと、一に感謝、二に感激、三がなくて五に感謝しかありません。本当にありがとう。東京への一極集中や田舎町から大都市への人口流入を考えたら、このことはそれを解消する一つになることではないかと思えるくらいです。東京邑南町ふるさと会の総会に生前数回出席頂いた「新日本石油の生みの親」と言われる故渡文明・元経団連副会長も、戦時中疎開先の阿須那での生活が後々の役に立っただと言われていたのを思い出します。疎開とは時代も状況も違いますが、自然の中での高校生生活で培った経験がきっと今後の人生に良い影響を与えてくれることでしょう。先日九月十三日から秋季中国地区高校野球大会島根県予選を兼ねた島根県高校秋季野球大会が開催され、見事3位になりました。悔いのないように頑張ってください。





# 令和六年度「年会費」のお礼とお願い

本支部の運営経費は、皆様方からの会費と寄付金で運営されております。本年度も大勢の方にお納め頂き、有難うございました。心より御礼申し上げます。経費節減に努め、周年行事や、在校生の活動の応援等に役立てられるよう積立もしております。ご協力ください。何口でも、何度でもお納め頂くことが出来ます。一口千円として何口でも、二口以上のお納め頂ければ幸いです。払込取扱票をご活用下さい。ATMで送金される場合、現金ではなく、ゆうちょ銀行のカードや通帳で手続き頂くとお振込み手数料がいくらか安くなるようになります。よろしくお願います。尚下記のご芳名は、令和六年四月以降に年会費をお納めいただいた方のご芳名です。

私が上京して初めてか、久しぶりに総会に出席した時に、過去数年分の滞納している会費を支払うように言われ、お支払いしたことがありません。当然のことと言えども、それまでですが、会費以上の金額をお支払いすることになって、複雑な心境だったのを覚えております。大相撲の関取の唄「相撲甚句の歌詞の中に「立つもづくし」というのがあります。一月門には松が立つ・十月出雲に神が立つ、十一月も早たつて、十二月ともなつたらなら、どこの家でも同じこと、借金取りが門に立つ、借りた覚えはあるけれど、返す時には腹

**年会費 一口1000円 何口でもお納め頂けるようになっています。**  
**口座番号 00140-0-72177**  
**◆金融機関からの振込用 口座番号 ゆうちょ銀行 019 (ゼロイチキュウ) 店 当座 0072177**  
**口座名 矢上高校卒業生会東京支部**

が立つ」と。談して、今の思いから役員の皆様と相になつています。性善説の考えです。「去年払うとらんけえ、今年やあ」と。多めに会費ゆう払うところか。お務局を引き受けてから二度総会に伺いました。若い頃に伺った時には参加者が、おそらく百人以上、もつといらつしゃつたと思ひます。とにかく賑やかだったことを覚えています。今も役員の方々と時々電話でいろいろ教わっています。関西には毎年十数万円寄付される先輩がい

東京矢高会の安定的な運営にご協力ください。宜しくお願いいたします。

## 令和七年度第五十回記念総会 五月十八日(日)アルカディア 市ヶ谷私学会館で開催予定

- 10口 三宅光寛 (21期)
- 6口 伊崎悦子 (14期) 山田 勅 (18期)
- 3口 酒井富雄 (22期) 古賀真知子 (26期) 三宅雅寛(23期) 戸司恵美子 (27期)  
上田一夫 (22期) 伊丹里美 (11期) 三宅良二 (35期) 植昇 (30期)  
植田豊 (13期) 三宅正隆 (10期)
- 2口 宇津本由紀子 (8期) 服部 豊 (15期) 佐々木チツ子 (6期)  
藤橋百合恵 (21期) 竹板美津枝 (18期) 宮田勝 (14期)  
後藤勝子 (6期) 木村信恵 (18期) 上田敏道 (19期) 日野原育生 (8期)
- 1口 枝久保美千恵 (23期) 森岡武 (14期) 洲浜豊和 (12期) 安原暁 (19期)  
伊東順子 (23期) 神田信子 (23期) 辻井道子 (11期) 濱田逸子(14期)  
江藤洋子 (13期) 門屋邦子 (12期) 倉持桂子 (14期) 伊賀美穂(21期)  
高山恒子 (15期) 島村不二子 (19期) 柳瀬百合子 (8期)  
岡部輝生 (21期) 椿美津枝 (13期)

## 編集後記

今年も早いもので、十月の矢上高校卒業生会総会の案内を出し、何年も前に折り返し、お返事を頂戴しております。誠に勝手ながら、お返事が遅くなりましたこと、お詫言申し上げます。お返事が遅くなりましたこと、お詫言申し上げます。お返事が遅くなりましたこと、お詫言申し上げます。